

発達と集団と活動

特集

乳幼児期における自発的あそびにみられる
子ども同士のかかわりの展開

西川 由紀子

要旨

本稿では、乳幼児期の保育園でみられる自発的あそびに注目して、子ども同士のかかわりがどのように獲得されていくのかを事例に基づいて解説した。子どもたちは、1歳後半には自ら友だちとかかわりをつくり出すようになる。2歳では「相互模倣」、3歳では「ごっこあそび」を子どもだけで展開し、友だちと一緒にいるたのしさを積み重ねる。相手の気持ちを理解し始めたり、おとなを対立的にとらえて悪ふざけをしたりして、友だち関係が深まる。4歳では「～ダケレドモ～スル」と見通しをもって、集団の中でよりよい自分を選ぶ力が出てくる。一方、おとなの指示に従わない行動が目立つことがあるが、子どもが主体的に行動できる余裕のある生活の構成が必要となる。5歳では、自己主張するとともに友だちの意見に耳を傾け、話し合うことができるようになる。子どもたちはそれぞれの時期に友だちと共感し、励まし合うなかで、さまざまな力をわがものにしていく。

キーワード 乳幼児期 自発的あそび 子ども同士のかかわり

1 保育現場で見られる子どもの姿

近年、乳児保育の普及が進み、厚生労働省「保育所等関連状況取りまとめ（平成28年4月1日）」によれば3歳未満児の保育所等利用児童の割合は32.4%である。保育所の必要性については保護者の就労保障の側面を強調する傾向があるが、保育所は子どもが人とかかわる力やさまざまな学びを積み重ねる貴重な経験を保障する、子どもにとって必要な場である。子どもたちは、集団の中で自己主張をし、相手もまた主張をする主体であることに気づき、お互いを尊重し合って、いっしょに過ごすことを楽しめるように発達していく。本稿ではそのプロセスを子どもの自発的なあそびに注目して解説し、質の高い保育が子どもに

にしかわ ゆきこ
京都華頂大学現代家政学部

とってたいせつであることを確認していく。

2 1歳児の友だちへの興味

まず0歳児クラスの子どものかかわりを紹介したい。

〈事例1〉0歳児クラスの9月。子どもはそれぞれ自分の気に入ったおもちゃであそんだり、保育者が主導して絵本や「いないいないばあ」を展開してくれると、友だちといっしょに笑いあったりして生活していた。1歳3か月のKE児とYU児が、並んで食事をしている場面。保育者に食事介助してもらいながら食事が進んでいくが、その間に子ども同士のアイコンタクトはない。食事が終わり、最後にお茶を出された折、KE児がコップを斜めにして少しずつお茶をこぼしながら保育者を見つめる。保育者が「あーあー」とあわてて机を拭く。間髪入れず、YU児もKE児と同じ仕草でお茶をこぼしながら保育者を見る。保育者、

驚いて机を拭く（筆者観察）。

このお茶こぼしの場面に至るまでの食事中、友だちに対する関心はないように見えたが、隣の友だちの行動や、それに対する保育者の反応に関心を払っていることがわかった。

この時期の模倣は、おとなの行動をまねてブラシを頭にあてたり、おとなの「バンザイ」のしぐさをまねたり、おとなとのコミュニケーションのひとつのかたちとしてとらえられるが（岡本、1982）、同年代の子どももまた、模倣の対象になっていた。しかしここでは、KE児とYU児の間には模倣の後にも、アイコンタクトはなく、この模倣から子ども同士のコミュニケーションは生まれていない。

次に、保育者の実践記録から、1歳児が友だちに注目している場面をあげる。

〈事例2〉食事場面。0歳児クラスで一番小さい4か月のけいこさんの離乳食が始まったことに気づいた1歳2か月のようくんは、思わず立ち止まり、けいこさんの顔をやさしい顔でのぞき込んだ。そして「いっしょやなー」と言いたげに保育者の顔を見てにっこりした（射場、2006）。

まだことばで自分の発見を表現できない1歳2か月の子どもが、友だちの成長に気づき、それを保育者に伝えていることがわかる。

次の1歳半のようくんとかなさんは友だちの行動の理由を理解している。

〈事例3〉ホールからさおりさん（1歳）とけいこさん（9か月）は部屋までハイハイで帰ることになった。先にとことこ歩いて行く大きい4人に、少し不安になったさおりさんが「ふえーん」と泣き出した。するとようくん（1歳6か月）が戻ってきて、心配そうにさおりさんの顔をのぞき込んで一緒にハイハイをはじめた。保育者がやさしいなと話していると、かなさん（1歳6か月）も戻ってきてハイハイを始めた（射場、2006）。

小さい友だちが泣き出した理由を状況から判断して、友だちに合わせて自分もはいはいするということができていく。木下（2016）が1歳半まで

に、「自他ともに何らかの意図をもった主体」として理解できるようになるとまとめているように、友だちを自分とは異なる存在として注目し、自分なりに友だちを理解していることがわかる。平日8時間以上をともに過ごす生活の中でつくられた、友だちとの関係である。

3 「かみつき」が起こるほどの取り合いをするのはなぜか

北九州市保育士会（2013）が2008年に実施したかみつき児の月齢別の出現状況の調査によれば、15か月から23か月に顕著な多発期が認められた。この時期は、友だちに対する興味が募り、かかわりを求めてトラブルが起こることも増えていく時期である。友だちへの関心が高まっている子どもたちにとって、友だちが持っているそのミニカーが欲しくなったり、友だちが座っているその場所に座りたくなったりすることにより、取り合いが頻発する。

1歳前半では、ミニカーをもっている友だちの腕を噛んで、ミニカーを自分のものにしたたり、友だちを押しつけてその場所に自分が座ったり、そのもの自体、場所自体へのこだわりが比較的強く見られるが、1歳後半になると、ものや場所のみではなく、友だちとのかかわりを求めていることがある。

〈事例4〉A児がミニカーを3つ机に並べてあそんでいるところにB児がやってきて、ひとつを取り上げようとした。A児とトラブルになる前に保育者が介入し、B児に「これはAちゃんの」と伝え、別の場所であそぶことになった。しばらくして、A児はミニカーであそぶのを止め、近くで絵本を見てあそんでいる子どもの方に移動した。B児はそこで再び3つ並んだミニカーのところへ戻りそのひとつを持つと、A児の方に移動し、A児の目の前にミニカーを提示した。しかし、A児は関心を向けなかった。すると、B児はミニカーを元の場所に返し、今度は手ぶらで絵本のコーナーに行き、A児を含む子どもたちとあそび始め